



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	須川長之助植物採集談
Author(s)	山田, 玄太郎
Citation	札幌博物学会会報, 1(1), 11-14
Issue Date	1906-06-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60759
Type	journal article
File Information	Vo.1No.1_002.pdf



須川長之助植物採集談

山 田 玄 太 郎

TSCHÖNOSKÉ SUGAWA, A FAITHFUL SERVANT AND COLLECTOR TO MAXIMOWICZ.

BY GENTARO YAMADA.

Professor of Botany, Agricultural and Dendrological College, Morioka.

須川長之助は陸中國紫波郡水分村字下松本の人なり。嘗て露國植物學者マキシモヴヰツチ氏の爲めに、普く本邦の植物を採集し、其名海外に聞ゆ。マ氏長之助の勞を賞し、其名を以て植物に命ずるもの十種に餘る。年六拾有四、先きに嗣子を失ひ、孫兒を養ひて農耕に従事す。昨三十七年二月、余始めて同人と相見るの機を得て、採集談を聞く、今其大要を録す。唯一回の會話によるものなれば、誤傳謬聞の少なからざるは豫め謝する所なり。

採集の由來。長之助は年甫めて二十、函館に出稼し、先づ大工の家に寓し、後八幡宮の別當に僕たりしが、マキシモヴヰツチ氏の來朝に際し、友人の勸めによりて風呂番と掃除とを務とし、月壹兩二分にてマ氏に仕ふ、時實に文久元年三月なりき。(後次第に二兩、二兩二分、三兩を受くるに至れり)。居ること十餘日、マ氏尋ぬるに植物

の名稱を以てす、**長之助**知ること多からずと雖ども、田野の間に人となりたることゝて、多少の知る所あるを答へたるに、マ氏大に喜び、然らば來れとて、杉山(臥牛山)に上りて植物採集の法を授け、後には植物を指名して採集に赴かしめたるに、忘れて採り來らざるものなどあるときは、痛く詰問せられたり、斯くして次第に熟練するに従ひ、マ氏の意を満すに至りぬ、是れ**長之助**が植物を採集するに至りし始めなり。

採集の地方。初めは函館近郊を採集し、文久元年五月に至り、マ氏に従ひ、大野を経て駒ヶ嶽、鹿部に採集し、東海岸を廻りて歸れり。同年秋に及び果實をも採らざるべからずとて、**長之助**をして再び駒ヶ嶽に採集せしめたり。十月マ氏長崎に航せんとするに際し、**長之助**を同行せんとて、大に勧誘せしに、**長之助**も初めは躊躇顧慮容易に決せざりしが、遂に同行を諾するに及び、マ氏は實に歡喜の情に堪へざるが如くなりしとぞ。函館奉行所よりマ氏の從者として免狀を受け、外國船にて横濱に航し、居ること四十餘日、其間僅かに其附近を採集せり。同年十二月頃長崎に着す、其年は長崎附近を採集し、翌年春再び横濱に來り秋まで滞在し、又長崎に歸航す。文久三年は九州各地を跋涉し、彦山、阿蘇、霧島の諸高峰に攀登せり。唯薩州のみには英艦砲撃時代のことなれば、危険を慮りて足を入るゝを得ず、蓋しマ氏は當時自由に旅行するの便なきを以て、**長之助**に採集せしめたるなり、同年秋三度び横濱に出て、元治元年一月マ氏の歸國すると共に、**長之助**はニコライ氏の許に使はる。

マ氏歸國後其依頼にて慶應一、二の兩年間植物採集に従事す、前年は信州地方、次年は南部地方にて岩手山、早池峰、駒ヶ嶽(秋田境)及恐山等を採集せり。其後明治二十年マ氏より書信ありて再び採集を命ぜられ、六月頃より出て、信州の木曾、駒ヶ嶽、御嶽、八ヶ岳、淺間山、富士山、天城山等の峻峰に登りて、十月に歸還し、二十一年の春、菱川周作といふ人を書記として伴ひ、伊勢に向ひ、それより那智山に

廻りて、大坂に出で四國に渡り、又西海に航し薩州に入ることを得たり。二十二年には齋藤松太郎と云ふ人を語らひ、山陰道に進み、京都に至りて名所舊蹟に採集し、轉じて加賀の白山、越中の立山に登り、鳥海に向ひしが降雪の爲めに登らずして歸る。此間に岩手山、早池峰山等にも登山せり、其後マ氏の逝去するに及びて其業を廢せり。

採集の方法。長之助は旅行中現今使用せらるゝ如き採集罐を携へずして、漉返、仙華紙等を厚紙板の間に插みて携行し、日に一回紙を取換へ、宿舍に着けば糸にて縛り、爐邊に立て、乾燥せしめたり。初めは一種三十個の標本を採り、珍らしきものに至りては四十個を採るものあり。二十年後には一種十個の標本を製す、花又は實なきものは採らず、一度得たるものは再び集めざるを常とす、故に後には一種を發見するにも容易ならざるなり、植物の高さ及所生の場所(山とか澤とか木の上など)は一々記載し上下の葉、草の根等は注意して蒐めたり。曾てマ氏長之助に諭へて曰はく高山の植物は花咲き、實成る僅かに三十日にして了る、努力する所あれと。マ氏歸國後の採集は、希臘加特立教會のアナトリウス氏の監する所にして、月拾五圓旅費一日二十錢荷物運賃一里二錢を受け入用の物品はそれ々々現物にて支給せられたり。

マ氏の平生。マ氏は身の丈五尺四五寸、瘠形にして、顔少しく長く、僅かに髯あり、多く室内にありて、始終書冊を手にして研究せられ、植物の日本名などを紉されて記し置かれたり。函館に在りし時は言語不通の爲めに、返答に苦しむことありしが、後には邦語にて話さるゝに至り、閑あれば種々の談話を試みられたり。蒐集せらるゝものは植物のみならず、鳥獸、蛇、龜、昆虫の類に及ぶ、長崎に在りし時は、ジ・ボルト氏と往來せられたり、マ氏曾てジ氏の植物採集の場所を語らざるに苦しむと言はれたることあり。

マ氏の使用する所は、長之助の外、厨夫、園丁、小使及び馬丁各一

人あり、或る日**長之助**、**マ氏**の室内を掃除するに當り、二朱金の遺失せるありしかば、之を机上に置きしに、**マ氏**は汝のものならんとて之を返し、も、**長之助**固く拒て受けずして力爭せしかば、**マ氏**深く**長之助**の正直に感じ、他の使用人に對すると趣を異にするに至れり。九州を旅行するに當りて、百金五十金を持ち行かshめて残りあれば與へ、詳細の詮議をなすことなかりしも、蓋し**長之助**が正直の致す所なりしなん。
